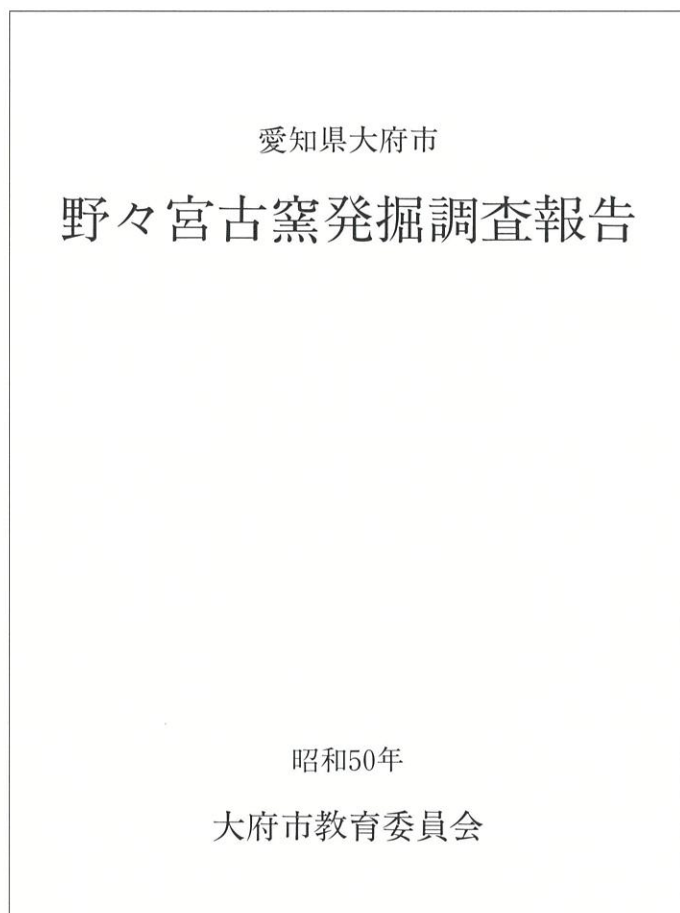


3. 野々宮古窯発掘調査報告書

(表紙)



序

大府市は市制5周年を迎えました。

大府市は名古屋市の南部に隣接し、鉄道と道路による交通の要衝を占めています。市内の各地に工場が建設され、年々人口が激増し、これに伴う宅地造成工事がさかんに行なわれています。

この社会変動に即して、昭和41年、文化財保護条例を制定しました。委員には斯界の専門家を委嘱して、それぞれの分野の文化財保護につとめてきました。とくに市制施行以来、地域の開発の進行と相まって文化財の保護活動を一層活発にいたしました。なかでも、大府市は知多古窯址群の北限に位置し、市内の各所に古窯址が存在しますので、埋蔵文化財に深く関心をよせてきました。これが吉田第1号窯、吉田第2号窯あるいは惣作遺跡などの発掘調査となり、それぞれの調査報告書を刊行いたしました。野々宮古窯の発掘調査も埋蔵文化財保護事業の一つであります。

本書は野々宮古窯の発掘調査報告書であります。この古窯は農地造成工事中に発見されたもので、遺構の破壊や遺物の散逸により、執筆者の方々は本書完成に種々苦勞されました。ここに、炎天下の発掘にご協力くださった方々とあわせ、深く感謝の意を表します。

昭和50年9月1日

大府市教育委員会

教育長 水野明治

例言

1. 本書は愛知県大府市吉田町野々宮56・57番地に所在する窯跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は大府市教育委員会が主体者となり、日本考古学協会員加藤岩蔵が担当者として行なった。
3. 本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章	……………	加藤岩蔵
第2章	……………	伊藤 新
第3章	……………	加藤岩蔵
第4章	……………	磯部幸男
第5章	……………	加藤岩蔵
第6章	1 ……………	加藤岩蔵
	2 ……………	加藤岩蔵
	3 ……………	杉崎 章

4. 発掘調査の際は、愛知県立大府高等学校郷土研究部員が作業にあたり、次の方々の援助

をえた。

大府市文化財保護委員——中井俊道、坂野好文、浅井恒道、村上円寿、深谷菊之助、浅田好逸、加藤源之進、安藤誠拙、大島★一、浜島芳夫

大府高等学校郷土研究部員——鈴木信康、竹下篤志、松本雅英、矢田友晃、山口 宏、月東ちづ子、小野寺裕子、牧野三智子、堀田昭美、池田政治

日本考古学協会員——杉崎 章、立松 宏、磯部幸男

日本人類学会員 ——中村信幸

5. 発掘調査事務は大府市教育委員会社会教育課で担当し、次の者が交代で当った。

坂野重金、榊田伸彦、伊藤邦英、間瀬穂積、三浦克仁、鷹羽保広、小田量三

6. 遺物実測図は加藤が作製したが、工事中に地主の浅田時孝や浅井恒道が採集した遺物も含めた。

目 次

第 1 章 野々宮古窯の位置
第 2 章 野々宮古窯付近の地形・地質
第 3 章 発見の動機と調査の経過
第 4 章 遺 構
第 5 章 出 土 遺 物
第 6 章 後 論
1. 野々宮古窯の編年	
2. 野々宮古窯の遺物に関する一考察	
3. 野々宮古窯と常滑窯の成立	

挿図目次

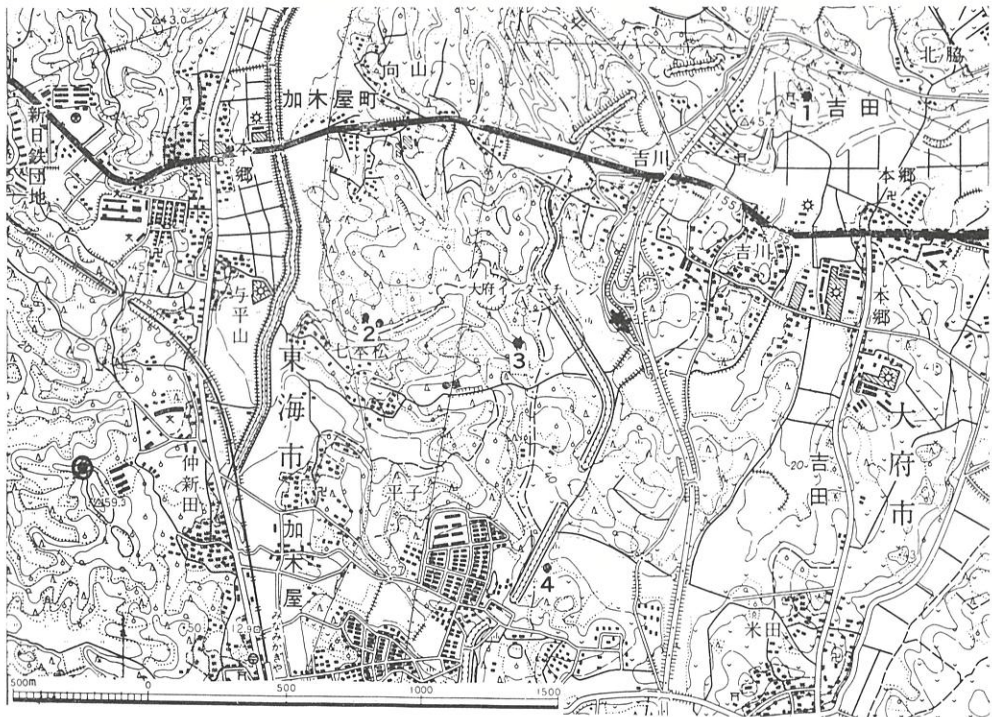
図版目次

第 1 図 野々宮古窯位置図	図版第 1 (1) 野々宮古窯の遠望
第 2 図 野々宮古窯付近の地質図	(2) 野々宮第一号古窯
第 3 図 野々宮古窯の発掘地点図	図版第 2 (1) 出土した皿・碗類
第 4 図 野々宮古窯の灰原断面図	(2) (1)の底部
第 5 図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その 1)	図版第 3 (1) 出土した皿・碗類
第 6 図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その 2)	(2) (1)の底部
第 7 図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その 3)	図版第 4 (1) 窯道具
第 8 図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その 4)	(2) 窯道具
第 9 図 知多半島北部の瓷器窯 (第二型式) と瀬戸市鉢割古窯 (第三型式) 出土遺物...		

第1章 野々宮古窯の位置

愛知県には蟹の手状に二つの半島が太平洋に向かって延びている。その一つが知多半島である。大府市は知多半島の基部に位置し、市域の中央部を南北に断層線が走り、東西に丘陵を分けている。野々宮古窯は西丘陵の斜面を利用して築かれ、その南面には石ヶ瀬川が形成した沖積低地が広がっている。野々宮古窯の所在する地籍は大府市吉田町野々宮56・57番地にあたる。

この位置は、名古屋環状線である国道155号線が知多半島を横断して、大府市と東海市横須賀町を走る中間点・吉川部落の北方約500mのところにあたる。遺跡の西方約300mのところには知多半島道路が南北に走り、そして、古窯の西南約1000mの地点には大府インターチェンジがある。



第1図 野々宮古窯位置図

1. 野々宮古窯 2. 定納1号窯 3. 権現山古窯 4. 論田古窯 ×印 吉田古窯 ●印 社山古窯

第2章 野々宮古窯付近の地形・地質

1. 古窯付近の地形 (第1図)

知多半島基部のこの地方は、尾張丘陵の延長にあたり、一般に40~50m程度の定高性を有する丘陵からなる。切峯面図からみた地形区分では、横須賀面(小起伏浸蝕面)が広く分布する地帯で、全体的に老年期の丘陵に属する。境川支流の石ヶ瀬川沿いには、高・低、二段面の河岸段丘が認められるが、そのうち高位の段丘は、本地点の西方に平坦面(32~34m)として残存し、丘陵の分水界にもなっている。この地方にも、河川により開析されてきた、浅く広い谷底平野(水田地帯)が発達している。石ヶ瀬川の谷は、大府より西方へ入りこみ、吉田町の吉川において南方へ曲折するが、この付近の東面する丘陵突端部の一部に形成された小支谷の谷頭緩斜面(高度約25m;開墾畑地の面)に本窯跡が存在する。その丘陵突端南面には、熊野神社があり、現地はその北背に当たる位置にあり、すぐ西方には、知多半島道路が南北に縦貫し、周辺の丘陵平坦面には、工場や団地が進出し、近年とみに開拓が進んでいる。

2. 古窯付近の地質 (第2図)

この地方(現地を中心とする大府市吉田地区)に露出する地層は、すべて新生代後期のもので、第三紀・鮮新世の瀬戸層群に属する矢田川累層が主体をなしている。ボーリング(試錐:帝国石油、大府市長草町大池)の結果からは、本域地下深部にも中新世の師崎層群の存在が確実であるが、本稿には直接関係がない。また、上位の地層としては、第四紀・洪積世の八事層があるが、高位丘陵面(70~80m)に僅かに点在するのみであり、このほか、段丘堆積物等も分布する。

矢田川累層は、名古屋東部~南部を中心に広く分布し、下位より順に、①砂礫を主とした水野相、②シルトを主とし、亜炭や火山灰を挟在する尾張夾炭相、③シルトと砂礫の互層する猪高相の三つの岩相を示している。大府市での推定、層厚は約550m。西隣の東海市地域には、矢田川累層のうち、比較的下位の尾張夾炭相に近い部分がかなり露出しているが、東部に及ぶにつれ、上部の猪高相が多く現われてくる傾向にあり、本地域はこの両者の漸移地帯とみられる。

猪高相の砂礫層は、白い凝灰岩と火山岩の円礫を含むのが特色で、礫はチャートが圧倒的に多く、他に、シルト岩・石英斑岩・ホルンフェルスなどがある。礫の粒径は5cm以下で、平均3cmくらいの中礫からなり、篩別度は余りよくなく、斜交層理も多く見られ、河成~湖成の堆積物といわれる。チャート以外の礫は風化してもろくなっている。砂は主に長石と石



第2図 野々宮古窯(×印)付近の地質図

英からなるが、長石は粘土に変化しやすい。尾張夾炭相のシルトが緑色を帯びる傾向があるのに比し、猪高相のシルト層は一般に灰色を呈し、水分の量によって濃淡を異にする。風化すると桃赤色を帯びることが多い。

本地点、窯跡の地層上の位置は、この猪高相のシルトの一部層に相当し、その厚さは約3 mくらいである。上方は細砂礫層が堆積し、下方は沖積層に覆われて不明であるが、次第に砂層に移行するものとみられる。この地域の地層の一般的な走向は南北性、傾斜は西方へ10°前後である。本地点のシルトは、灰白色を呈し、所により細かい砂粒を含むが、全般に緻密な粘土、シルトからなり、割理に富み天日にさらされると乾裂し、細かく風化されやすい性質もある。割理の面にやや樹脂状の光沢を帯びる点も特色である。亜炭や植物化石はよくシルトに挟在するが、本現場には認められない。また、この地方のシルトは全般に火山灰質に富むものが多いが、その粘土鉱物等の構成については研究が十分でない。粒度分析をはじめ組成に関する諸調査、微化石の検鏡等も今後の研究にまちたい。

第3章 発見の動機と調査の経過

大府市は数千基におよぶ窯跡が存在する知多半島の北部に位置する。近年、宅地造成や道路建設など開発事業がすすんでいる。このため、昭和43年と、昭和44年の両年度にわたって、吉田町惣左衛門池北10番地の1に所在する窯跡の発掘調査を行なった。この成果は「吉田第一号窯発掘調査報告書」および「吉田第二号窯発掘調査報告書」と題して2年度にわたり公開した。これが大府市民、とくに吉田町在住の人々に埋蔵文化財への関心をたかめる結果となった。

昭和47年1月8日 吉田町の坂野好文氏より「吉田の神社横の畑から藤四郎焼とちがった焼物が出土する」との連絡を受けた。さっそく、加藤は大府中学校教諭浅田宏司氏の案内で坂野好文氏宅をおとずれ、3人で現地踏査を行なった。現地は知多丘陵の傾斜面で、地主の浅田時孝氏がブルドーザーで耕地整理をしていた。掘り返えされた土塊の中には陶器片がまじっており、それらは平安朝瓷器であった。作業日程などを聞き、窯跡としての重要性を話して帰り、市教育委員会へ結果を報告し、善処を依頼した。

1月11日 市教育委員会の久野茂二教育課長、伊藤邦英社会教育係長および中日新聞大府支局長伊東氏ら4人で、再度現地を調査した。しかし、地形は1月8日の調査のときとはまったく変っていた。地表面には馬爪形の焼台や平安朝瓷器片が散在しており。遺構は完全に破壊された状態であった。畑も上段と下段の2枚に分かれ、その比高は1 m程度である。この断面に幸にも焼台を含んだ焼土層が2か所ほど現存していた。この2か所が、きわめて重

要であることを地主に話し、管理を依頼した。

この2か所を中心に窯体を確認するための発掘調査を夏休みを利用して計画した。

7月26日 調査関係者は午前9時に現地に集合する。まず文化財保護委員や市教育委員会主事らでテントを張る。ついで杉崎章氏や磯部幸男氏の協力をえて、第二号古窯が存在した付近にトレンチを入れ、発掘にとりかかる。表土は耕作のため、最近、他の地域から運び込んだもので、平安朝瓷器片が混入していなかった。表土層を排除すると有機土層があらわれ、平安朝瓷器片が混在して出土した。有機土層の最下部にうすく灰層が存在していた。この灰層を基点として、断面にあらわれている焼土層にむかって発掘をすすめた。灰層は上段の畑へ30cmほど食い込んだ点で完全に消滅し、断面にあらわれていた焼土も消えてしまった。

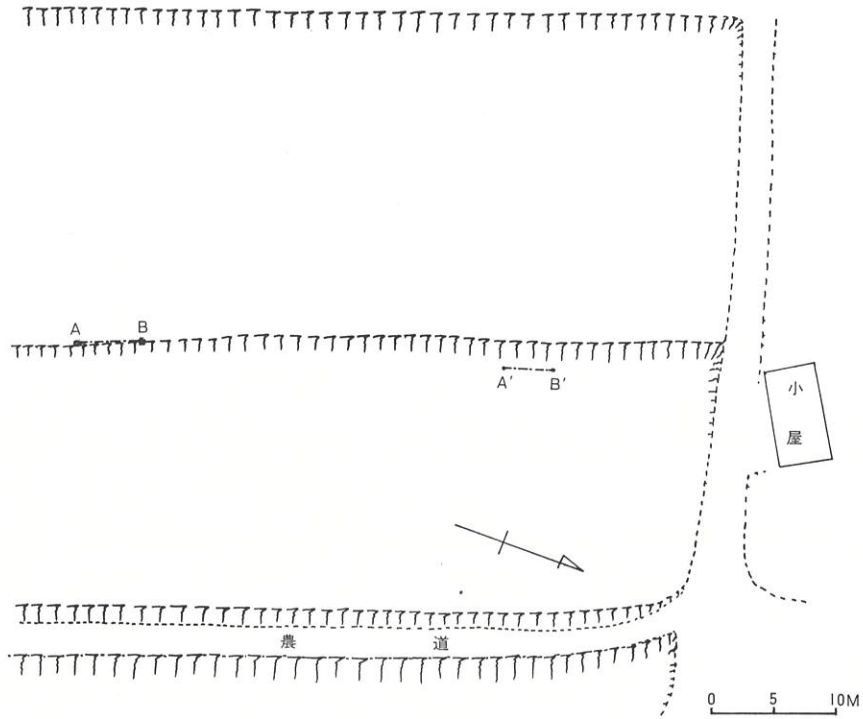
7月27日 午前9時より作業を開始する第一古窯の存在した付近にトレンチを入れ、発掘する。断面にあらわれていた焼台と焼土層は、上段の畑へわずかに入り込んでいたのみで、消滅してしまった。午後はA地点のトレンチを拡大して遺物の採集につとめる。

第4章 遺構

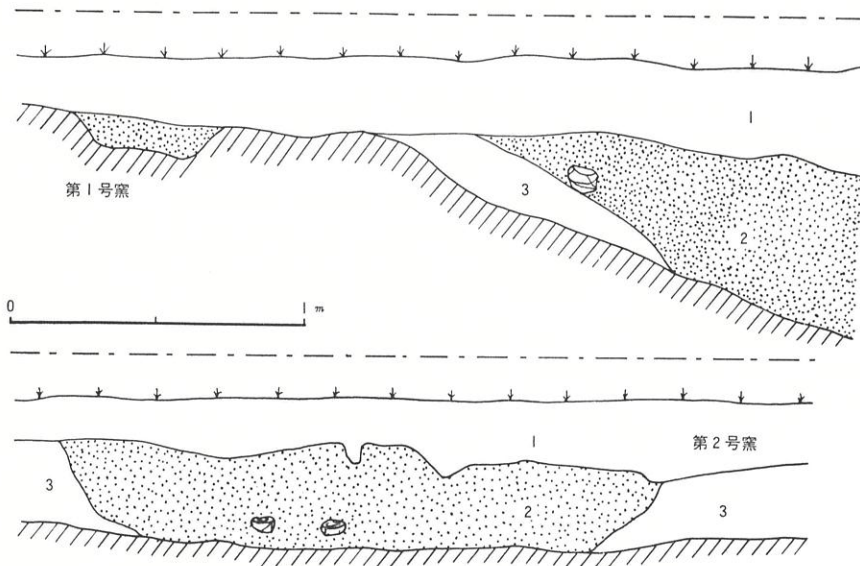
古窯の構築されていた丘陵の東側斜面は、開墾されて三段の畑となっていた。遺構は中段と下段の境をなし、北から南へ1メートル前後の高さでのびる土手に、50メートルほどの間をおいて2か所発見された。いずれも古窯の窯道具である焼台とともに、平碗や皿の破片をふくんだ層がみとめられ、とりあえず南の方の地点を野々宮第一号窯、北の方の地点をおなじく第二号窯として区別した。

1. 第一号窯灰原地点

畑の中段と下段の境から発見された南方の地点であるが、この付近の開墾前の微地形について、小さい支谷があり中央は水田となっていた付近と指摘されている。これを裏づけるように地山の層は南西方向から北東へむけて傾いており、現在もこの面から地下水の湧水が多くみられる。こうしたことから古窯址は、この支谷の南側に位置しており、やや西へ頭を偏してきづかれていたものと推定される。発見された地山の傾斜面にそって、厚さ20～30センチメートルの灰褐色土層があり、その上には灰まじりの黒褐色土層が北東へ向って深く堆積していた。上層の黒褐色土層が灰原層であるが、開墾のうちに攪乱されており、表面には黄褐色土が混入していた。そしてその下の灰褐色土層には焼土がまじっており、部分的には赤褐色を呈していた。上下二層の接する付近の下方からは、径15センチメートル前後の割合に大きい馬爪形焼台が多く検出される。一方、灰褐色土層の範囲は広くなく、地山と黒褐色土



第3図 野々宮古窯の発掘地点図
 (AB：第一号窯地点、A'B'：第二号窯地点)



第4図 野々宮古窯の灰原断面図
 (1. 耕作土 2. 黒褐色土層 3. 灰褐色土層)

層にはさまれた斜めの間層であって、それ自体が窯床面ではないことはいうまでもないが、床の表面を整地のおりにはぎとられた残りか、あるいはそれに近い状態であった。いいかえるならば野々宮第一号窯の窯本体は、実測した中段と下段の境の断面から南西方向へ斜めのび、間近の距離のところに位置しており、断面の北の部分は灰原のはじまりであると推定された。

2. 第二号窯灰原地点

北方の遺構も灰原であった。地山となる黄褐色の粘土層の上に厚さ30センチメートル前後の灰褐色土層が堆積しているのであるが、この地点では約2メートルにわたって灰まじりの黒褐色土層となっている。この層は東へ地山の傾斜にそって厚く堆積していて、きれいな仕上げの高台をもった平碗や馬爪形焼台を包含していた。しかし近世にわたる製品とみられる瓦も含まれていて、開墾の際の攪乱を裏づけるのであるが、この地点は西へ向けて登っていた斜面に築かれた野々宮第二号窯の灰原の一部と推定される。断面を実測することができた中段と下段の境の所では、灰をまじえた遺物層が約2メートルの幅に集約されているのに対し段から約4メートルほど下方に設定したトレンチでは10メートル近くの幅にひろがっていたことを考え合わせてみると、実測した地点は古窯の焚口から程近いところであると推定できる。恐らくは実測した段の面から2～3メートルも上の方へはなれたところに窯の本体があったのであろう。

×

野々宮第一号窯と第二号窯とも、中段と下段の境の断面からは、窯の本体を検出することはできなかった。しかし両者はいずれも焚口から程近いところと推定された。第一号窯が小さい支谷の南西斜面にのびているのに対し、第二号窯はほぼ断面に直角につくられていたと考えられたが、惜しむらくは開墾工事の中で窯の本体はけずり去られたものであろう。

第5章 出土遺物

遺物には工事中に関係者によって採集されたものと今回の発掘調査で出土したものとがある。その量はきわめて少ないが、すべて平安朝瓷器とこれを焼成したときの窯道具である。平安朝瓷器の器種は段皿、平皿、碗、壺の四種類である。これらは施釉品と無釉品に大別される。

段皿 (第5図1～2) 2個であるが、ともに灰釉が施されている。1は口径14cm、底径7.5cm、深さ1.6cmであり、2は口径12.5cm、底径6.5cm、深さ1.5cmである。そして口縁の幅は

1が3.2cm、2が2.2cmに仕上げられている。本古窯では2形態の段皿を焼成していたことがうかがわれる。

平皿（第5図3～16）出土した平皿は破片で、復元が可能なものは14例にすぎない。その計測値は次の表のとおりである。

（番号は第5図と共通）

番号	器高	口径	台径	台高	深さ	備考
3	2.9cm	14.0cm	7.5cm	0.7cm	1.7cm	灰釉
4	2.7	12.5	6.4	0.7	1.9	
5	2.5	15.0	7.0	0.5	1.5	灰釉
6	2.5	14.0	7.0	0.7	1.5	灰釉
7	3.0	15.0	8.0	1.0	1.7	輪花
8	3.0	15.0	7.6	0.6	2.1	輪花
9	2.3	13.0	7.0	0.4	1.3	
10	2.0	13.0	7.4	0.5	1.3	灰釉
11	2.5	14.0	7.0	0.7	1.6	
12	3.0	12.2	6.5	0.9	2.0	灰釉
13	3.2	14.0	7.0	0.9	2.0	灰釉
14	2.5	13.0	6.5	0.7	1.6	
15	3.0	13.4	7.0	0.6	2.1	
16	3.0	13.0	6.5	0.8	2.0	灰釉

復元できた14例の口径を基準に概括すると、15cm、14cm、13cm、12cmの4形態に分類される。そして、釉は形態に関係なく施されている。その数は7例で、出土例の半数を占めている。これを碗類と比較すると、圧倒的に皿類に釉が施されているのが目立つ。釉はすべて灰釉で施釉状態は陶器の内外面全体に施されているのではなく、底部や腰部にはかけてないところがあり、胎土がみられる。

碗（第5図17～24、第5図25～40）全容を知ることができたのは17.18.19の3例にすぎない。このほかは底部あるいは口辺部を欠いているが、計測のできた部分の数値を前記の3例とともに次の表にかかげた。

胎土は水こしをしたきわめて精選した陶土を使用し、器壁は薄く仕上げている。口縁はわ

(番号は第5、6、7図と共通)

番号	器高	口径	台径	台高	深さ	備考
17	4.0cm	14.5cm	7.6cm	0.8cm	2.9cm	灰釉 輪花
18	4.4	14.0	6.5	0.7	3.2	
19	5.5	17.0	9.0	1.0	4.4	灰釉
20			8.0	1.1		灰釉
21			6.5	0.8		灰釉
22			8.0	1.0		灰釉
23			8.5	1.0		
24			7.0	0.9		灰釉
25		15.5				輪花
26		15.0				輪花
27		17.0				
28		16.0				
29		18.0				
30		19.0				
31		14.0				
32		14.0				
33		11.0				
34		14.0				灰釉
35			8.0	1.1		

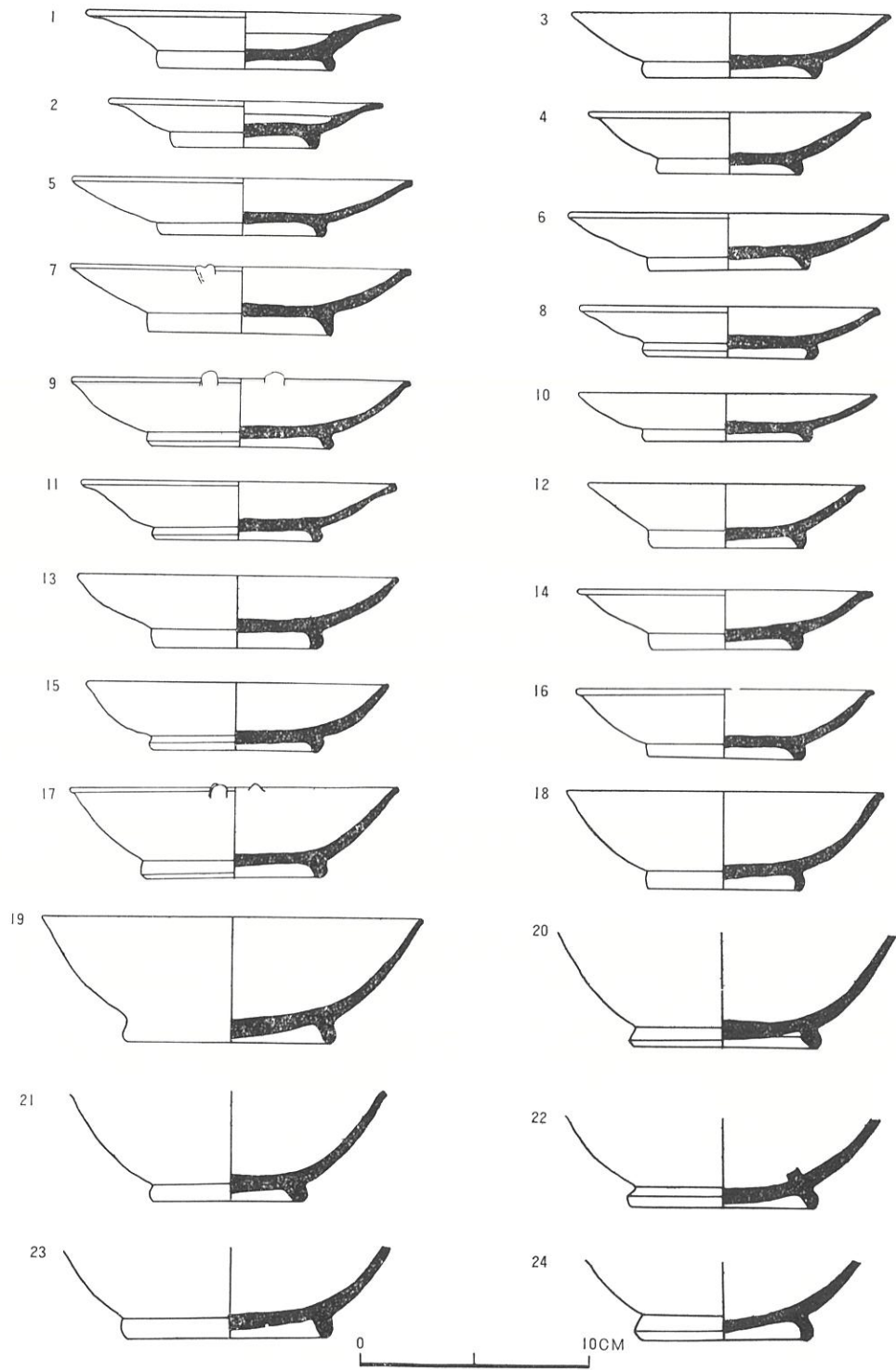
ずかに外反している。底部には、断面が内湾した形に仕上げられた高台や外へ張った丸高台が付けられている。口径は最小のものが11cm、最大のものが19cmであるが、14cm内外の中形碗と18cm内外の大形碗が生産の主体であったと考えられる。碗の器体には灰釉を施したものと釉を施していないものがある。そして、灰釉が施されているといっても、器体の内外の全面に施されているのではなく、主として口辺部に淡く施されているのみである。

壺 (第7図80) 底部の小破片である。壺と断定するには小破片すぎるが、形態が平安朝瓷器の壺の高台にきわめて類似しているので、壺として分類した。

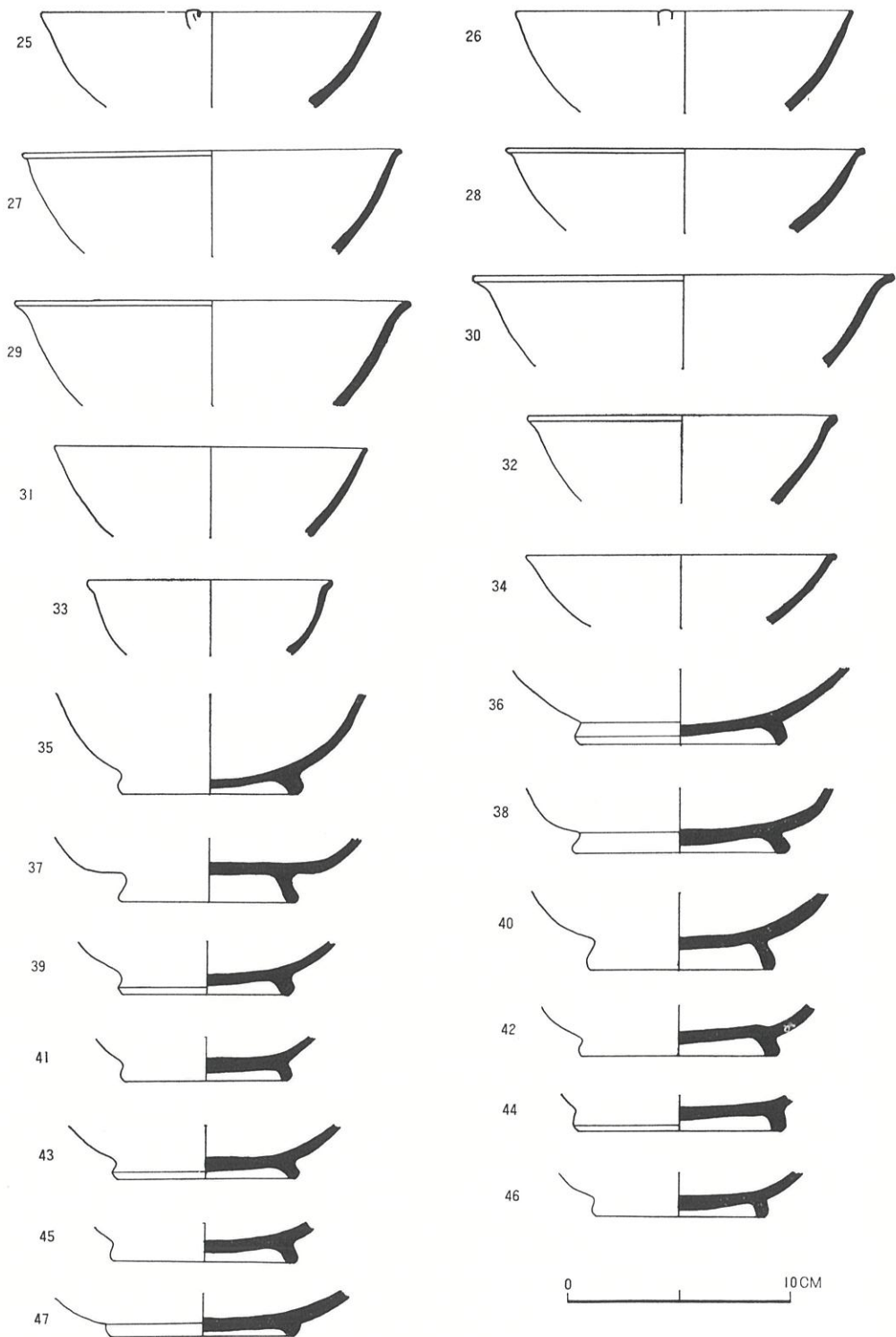
窯道具 (第8図1.2.3.4) 圧倒的少量に出土した窯道具には焼台がある。その形は馬爪形である。その他には第8図に示したものがある。3は土塊3個を積みあげた円錐形をなしたもので、底径約15cm、高さ24cmに仕上げている。4は上部が折損して全容は明確でないが、

番号	器 高	口 径	台 径	台 高	深 さ	備 考
36			9.0	1.1		
37			7.5	1.5		
38			9.5	1.1		
39			7.5	0.9		
40			8.2	1.5		
41			7.5	0.6		
42			8.7	1.1		
43			8.0	0.7		
46			7.5	0.7		
47			8.0	0.6		
49			7.0	0.6		
51			6.4			
66			7.4			
67			6.7			

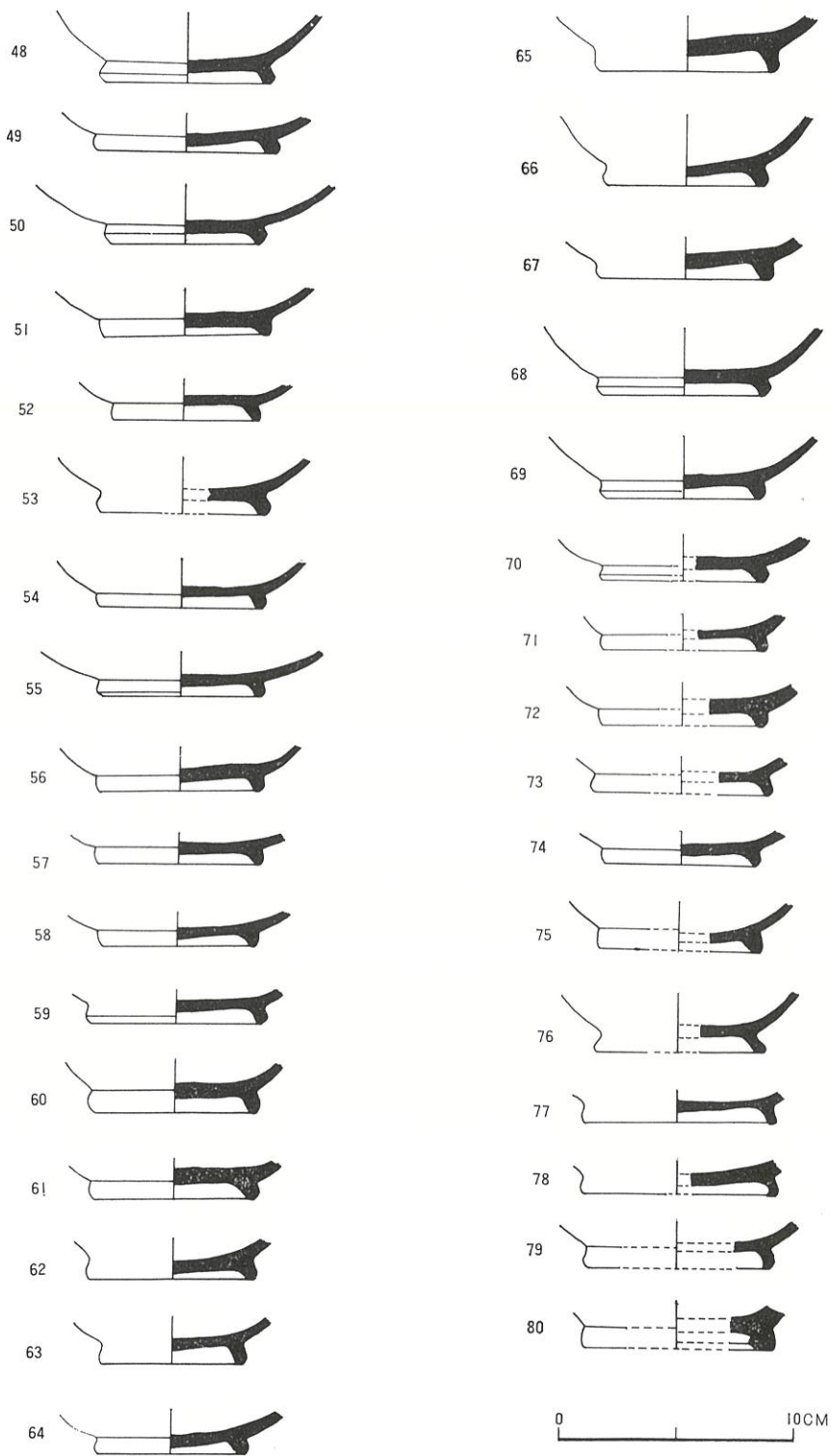
現存する状態は円盤状の土塊4個を積みあげている。その高さは約21cm、底面の径は14cmをはかる。1、2は饅頭形の土製品である。底面は円形で、その径は約10cmと約7cmである。



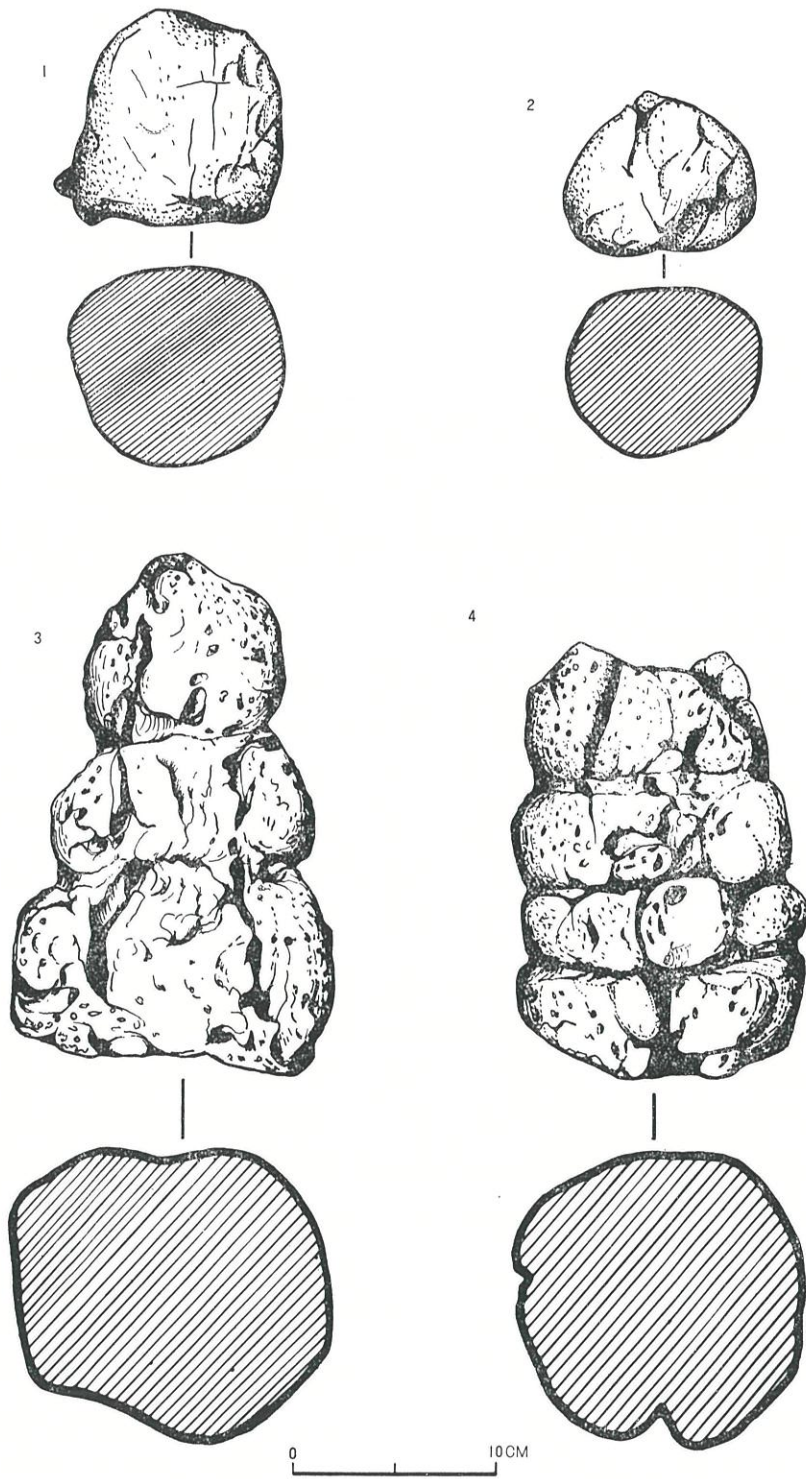
第5図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その1)
 第5図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その1)



第6図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その2)



第7図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その3)



第8図 野々宮古窯出土の遺物実測図(その4)

第6章 後論

1 野々宮古窯の編年

野々宮古窯の製品はすべて平安朝瓷器である。平安朝瓷器は胎土が灰白色で、砂などは混じらず、表面に灰釉、緑釉などが施されている平安時代の陶器をいう。そして、その前半期の製品には「三叉とち」「輪とち」「筒形焼台」などの多種多様の窯道具を使用して、浮き彫り、透かし彫りなどによる絵文様を加えたものがある。このように、一概に平安朝瓷器と称しても、製作期間が9世紀末のころから12世紀中葉にかけ約200～300年の長期間にわたっているため、器形や製作技法などに変化がみられる。これを東海地方では三型式に概括している^(注1)。

第一形式の器形には奈良朝様式須恵器の第二形式の器形に相通するものがあり、継承関係がうかがわれる。とくに多量に生産された碗は奈良朝様式の第二型式須恵器の丸底の坏に、断面形が角ばった高台を付しているように思われるほどである。製品の種類も奈良朝様式の第二型式須恵器とほぼ同じである。が、窯道具には施釉陶器の生産に必要な「三叉とち」や「さや」など多種多様の窯道具が多量に使用されているところが前者とことなる。

次の第二形式は器面の施釉もうすく、光沢がわずかに見られる程度となり、「三叉とち」や「さや」の使用もまれとなる。また、碗や皿の高台は外に張り出し、その断面形が内湾した形に内外面とも削って仕上げられている。そして、この第二形式の平安朝瓷器の製作年代は10世紀後半から11世紀前半に編年されている。

最終の第三形式では、窯道具としては「三叉とち」や「さや」などが姿を消し、もっぱら馬爪形の焼台のみが使用されている。製品は碗と皿とが多量に生産され、しかも、これらには釉が施されているが、きわめて粗雑にしかも部分的である。高台は断面が三角形に近い形をなしている。とくに第三形式の碗を次の時代に盛行した行基焼の第一形式の茶碗と比較するときわめて類似しており、平安朝瓷器と行基焼とが継承的關係にあることが知られる。

野々宮古窯の製品は碗と皿とが圧倒的に多量を占め、種類はきわめて減少している。また、窯道具も三叉とちやさやなどがみられず、第三形式期に盛行した馬爪形の焼台のみである。これらは平安朝瓷器の様相に共通するものである。しかし、灰釉を施した碗の出土例は少ないがその高台は断面形が内湾した形に内外面とも削って仕上げているし、第二形式の特徴をもった外に張り出している丸形の高台が多く検出されている。なかには、平安朝瓷器の前半期に多くみられ輪花碗の手法の痕跡をとどめているものもある。また、相当数の皿には灰釉

が施されているし、絵文様は見られないがその痕をとどめて口縁部を巾広く仕上げた段皿も出土している。これらの特徴から考えて、野々宮古窯の製品は平安朝瓷器の第二型式に属すると考えられ、その製作年代は平安朝瓷器第二型式期の後葉に比定したい。

この平安朝瓷器の第二型式の前半期には、野々宮古窯の北方約10kmの鳴海丘陵に古窯群が形成されている^(注2)。そして、野々宮古窯と至近距離にあるのが豊明市九左山古窯である^(注3)。これらは猿投古窯群の支群ともいうべきものである。鳴海古窯群における生産の開始は奈良朝様式須恵器の時期にはじまり、平安朝瓷器の時期には灰釉陶器のみならず緑釉陶器も生産している^(注4)。これらのなかには筆書き、線彫り、透かし彫りで絵文様を飾った製品も検出されている。そして平安朝瓷器の第二型式の時期のころにいたると、他の地方では生産が減少の傾向をたどるが、尾張では国司や荘園領主によって生産体制は維持され、そのうえ全国的に名主層の成長に伴って尾張瓷器の需要が増大した。このため、製陶地域の拡大が必要となり、これによって築造されたのが野々宮古窯であり、名古屋市緑区大高町の夜寒古窯・中平部古窯・南平部古窯、東海市の定納古窯などであろう^(注5)。換言すれば、これらの古窯は鳴海古窯址群の補助的役割をになっていたと考えられる。また、地理的にみれば、拡大地域は、知多半島では大府市と東海市横須賀町を結ぶ国道155号線までといえよう。

注 1. 加藤岩蔵・久永春男「刈谷市の古窯」刈谷市誌編纂委員会 昭和33年刊

2. 愛知県教育委員会「愛知県猿投山西南麓古窯址群」 昭和33年刊

3. 三渡俊一郎「九左山古窯址群調査報告」 豊明市教育委員会 昭和48年刊

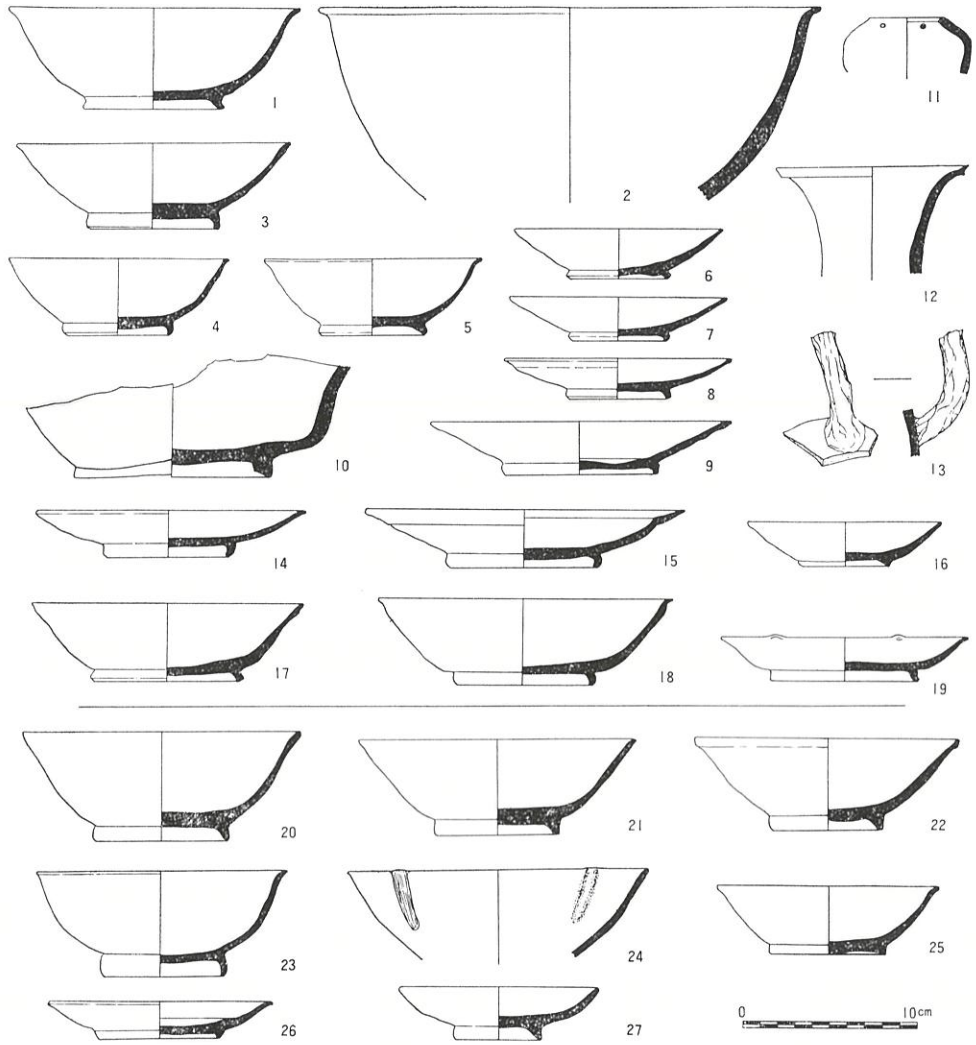
4. 谷沢靖氏所蔵の名古屋市緑区鳴海町亀ヶ洞古窯出土の資料による。

5. 夜寒古窯、中平部古窯、南平部古窯、定納古窯が平安朝瓷器窯であることは杉崎章氏の教示による。

2 野々宮古窯の遺物に関する一考察

野々宮古窯はブルドーザーによる工事で破壊され、その構造は明確でないが、地主が工事現場を撮影した写真に、比較的窯の構造を判定できるものが数枚あった(図版第1の2)。これらによると、他の地域の第二型式の瓷器窯でみられるように、丘陵の傾斜面を利用して地表を溝状に掘り下げて天井を粘土でふき、焚き口を傾斜面の下位にもった、いわゆる半地下式の窖窯である。床面には馬爪形の焼台をならべている。この馬爪形焼台は発掘調査の際に灰層から多量に出土している。

地主の浅田時孝氏宅には、工事中に採集された出土品が保管されている。このなかには、高さ30cm、基部の径約10cmの筒状の土製品と高さ約10cm、底径約5cmの饅頭形の土製品2個があった(第8図1.2.3.4図版第4)。



第9図 知多半島北部の瓷器窯(第二型式)
と瀬戸市鉢割古窯(第三型式)出土遺物
1～2 東海市定納古窯 3～13 大高町夜寒古窯
14～16 大高町南平部古窯 17～19 大高町中平部古窯
20～27 瀬戸市鉢割古窯(第三型式瓷器)

この筍状の土製品(第8図3.4)と類似した土製品が、過日、愛知教育大学用地に関係した古窯を調査した際に、奈良朝様式の第二型式須恵器を焼成した洲原第八号窯から出土した。出土位置は窯の焼成室と燃焼室と境をなしている地点であった。この全容は欠損していて明確でないが、残存部の長さは約20cm、径約13cmの円筒形で中軸に径4cmの孔のあいたスサ入りの土製品である。そして、筆者は、出土位置と平安朝瓷器窯や行基焼窯の構造から推定して、これを分焰柱に相当すると考え、「分焰棒」とも称すべきものであらうと報告書に記した^(注1)。これによって、固定した分焰柱をもつ平安朝瓷器窯以前には移動性の分焰柱が存したことを暗示した。しかし、野々宮古窯と同時期の窯には固定した分焰柱が築造されているのが通例で、野々宮古窯にも分焰柱が存在したと考えるのが妥当であらう。野々宮古窯出土の筍状土製品は洲原第八号窯の棒状土製品とは性格をことにしていて考える。この筍状土製品と類した製品が瀬戸地方の平安朝瓷器窯から出土している。そして「分焰障筍」という名称で、その形態や役割を「瀬戸市の古窯」で次のように発表している^(注2)。

「分焰障筍は大きさが径約10~15cm、長さ約50~60cmの粘土製の筍形で、窯の天井には届かないものである。その目的は分焰柱の焼成室側線に幾本かを並べ、焰がこの障筍の間隙を通過して焼成室に入り、急にひろげるためであらう。」と。

野々宮古窯出土の筍状土製品は、現在、4個ほど確認されており、瀬戸地方の分焰障筍と同じ目的で製作されたものと推察する。

饅頭形土製品(第8図1.2)は馬爪形焼台とほぼ大きさが似ているが、その形態がことなり、使用目的も馬爪形焼台と同じではなかったと考える。それは、かつて刈谷市の泉田古窯址群を発掘調査した際に、野々宮古窯と年代的に近い距離にある泉田第一号窯で、焼成室と煙道部との境界付近で片面のよく焼けた焼台が積み重なった状態で検出された。そして、これは窯の下位から昇ってくる焰を返す装置であると推定し、発表した^(注3)。この饅頭形土製品は、泉田第一号窯の焼台と同じ目的で使用されたものではなかろうか。出土位置が明確でなく、採集量もきわめて少量であるため断定しかね、ここに紹介して、その可能性を指摘しておくにとどめる。

野々宮古窯の製品の多くは灰釉が施され、形態も平安朝瓷器の第二形式としての特徴を有している。種類は平安朝瓷器第三型式期の窯の一般的特徴である坏と皿に集約され、第三型式への傾斜を示しているが、野々宮古窯付近には第三型式の瓷器窯は知られていない。野々宮古窯に次ぐもっとも古式の窯は、行基焼第一型式に属する大府市吉田町所在のハンヤ古窯^(注4)、東浦町八巻第3号窯^(注5)があげられる。これらの窯は野々宮古窯とは年代的に約100年のへだたりがあるが、灰釉を施した製品を焼成している。しかし、施釉製品は山茶碗、山皿という一般的なものにはみられず、むしろ特別製品とも考えられる輪花付大碗や片口、壺な

どに施している。この灰釉を施す技法を有した陶工は野々宮古窯を築いた陶工の系統であるか、否かは明確でない。

- 注 1. 加藤岩蔵・斎藤嘉彦「井ヶ谷古窯址群—愛知教育大学用地関係古窯調査報告—」愛知教育大学
昭和45年刊
2. 宮石宗弘「瀬戸市の古窯 第1集」瀬戸市教育委員会 昭和42年刊
3. 加藤岩蔵・久永春男「刈谷市の古窯」刈谷市誌編纂委員会 昭和33年刊
4. 大府市吉田町吉川在住の坂野好文氏の採集資料による。
5. 榑崎彰一「愛知県知多古窯址群」愛知県教育委員会 昭和37年刊

3 野々宮古窯と常滑窯の成立

(1) 須恵器から瓷器へ

尾張地方における陶器の生産は、名古屋の東部の東山から八事付近ではじまり、東山古窯址群とよばれているが、西暦5世紀後葉を発祥とする古墳時代の須恵器である。

古墳時代をすぎて、7～8世紀の飛鳥・白鳳から奈良時代になると、東山付近の須恵器の工人たちは、尾張・三河の国境一帯にひろがって猿投山古窯址群となり、一方では小牧市を中心に犬山市・春日井市付近に分布した尾北古窯址群が充実してきていて、このころの陶器は奈良朝須恵器とよばれている。奈良時代から平安時代前葉にかけて、全国的にみた他地方の古窯が急激に衰微していく中で、両古窯址群は質量とも発展をみせている。延喜5年(905)に編纂にかかり、延長5年(927)に完成した「延喜式」にも、踐大嘗祭の時に陶器を貢進すべき国として河内・和泉・尾張・三河・備前の5か国を指定して平安時代初期の段階で全国でも主要な生産地にかぞえられていたようである。

これらが無釉の陶器であるのに対して、平安時代になると灰釉陶器を大量に焼成し生産を高めている。平安朝の灰釉陶器は中国の越窯の技術にまなんだものといわれ、一般には瓷器とよばれている。猿投窯や尾北窯では平安時代になっても9世紀の初頭まで、奈良朝様式の伝統をもった須恵器のみを生産していたのであるが、9世紀から10世紀になると須恵器と瓷器を併せて焼いている。そして瓷器の後半にあたる11世紀の古窯は瓷器のみを焼いているという変遷がわかってきた。この点これまで陶器の歴史を語る人は、須恵器の時期から瓷器の時期さらに行基焼の時期へと、線で切ったように移行していくものと考えるのが多かったのであるが、最近の尾北窯の中の篠岡古窯址群における研究の成果により、平安朝瓷器は須恵器と併焼している時期が長期にわたり存在していることが証明されたわけである。

そして野々宮古窯の時期は、灰釉陶器すなわち平安朝瓷器を3時期にわけた編年において第二型式に比定され年代としては11世紀の初頭におかれよう。

(2) 知多半島基部における瓷器窯

知多半島の基部付近には野々宮古窯のみでなく、数個の瓷器窯が発見されており、北の方からあげると、夜寒古窯（名古屋市大高町）、中平部古窯（同前）、南平部古窯（同前）、野々宮古窯（大府市吉田）、定納古窯（東海市加木屋町）の5か所である。

野々宮古窯のそれは本書にくわしく報告されているが、中平部・南平部古窯については一部に報告^(注1)されているのみであり、夜寒古窯^(注2)、定納古窯^(注3)については、これまで紹介する機会が全くなかったので、ここにまとめて図示しておこう。これらの出土資料はいずれも第二型式に比定される特徴をそなえている。瓷器の第二型式は10世紀後葉から11世紀前葉に年代をあたえられている。

地域的にみて猿投窯と知多半島の常滑窯をつなぐ位置にあたるのであるが、この地域に分布する瓷器窯を見た場合、第一型式もなければ第三型式もない。第二型式の窯のみが5か所にわたってみられるのみである。この事実は順次に継続してひきつがれていく窯業従事者としての定着を示すものではなく、さらに広範囲の地域を基盤とした窯業、いいかえれば猿投窯の周辺地域における一角の姿を形成するものであることを示している。

そして大府市・東海市さらに名古屋市大高町といった知多半島基部の地域が、歴代の窯業地として発足していくのは、12世紀初頭のことで行基焼の時代に入ってからのものである。野々宮古窯から北方へ数100mはなれたところには、太平洋戦争に陸軍の飛行場滑走路を建設するために破壊した姫島古窯址群があり、古式の窯もふくまれていた。おなじく南方へ数100mはなれた奥池の西に沿って、12世紀に比定される行基焼第一型式の窯が今も現存している。

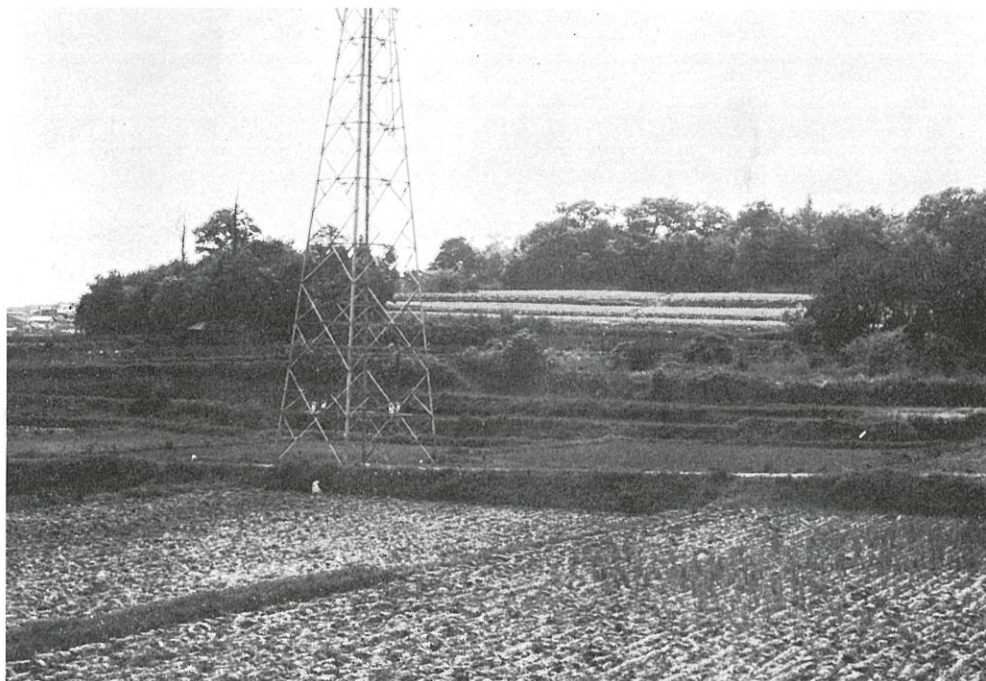
しかし野々宮古窯をはじめとする瓷器第二型式と、奥池古窯^(注4)などの行基焼第一型式との間には、1世紀にわたる時間的なへだたりがあり、その間を埋めるものは瓷器第三型式の陶器である。猿投窯の中でも瀬戸市山口の鉢割古窯^(注5)の資料は、瓷器第三型式の典型的なものとされており、前述した瓷器第二型式の資料との対比のために一部を図示しておくが、知多半島の古窯にはこういう時期の窯がみあたらない。知多半島基部の古窯分布をみた場合、瓷器の第二型式の時期に猿投窯の末端部としてわずかに波及をみてのち、約1世紀の空白を置いて12世紀初頭のころ、行基焼第一型式の段階になって再び古窯の火がともされ、窯業生産の活動をはじめたわけである。

(3) 常滑窯の成立

現在のところ確認されている常滑窯の最古の資料は、京都市今宮神社境内から発見された三筋壺であるが、壺の上に埋められていた四方仏石の一面に、阿弥陀如来とともに天治2年(1125)7月13日という年月日が線彫りされていて、少なくとも12世紀前葉における成立を示している。そして知多半島の中でも北部にあたる地域には、常滑窯の発祥期の古窯が指摘されている。東浦町緒川新田の八巻古窯^(注6)や東海市加木屋の泡池古窯^(注7)がそれであるが、これらの窯では山茶碗や山皿を主体として鉢や壺をまじえており、泡池古窯の耳皿には丈の高い高台がつけられ、八巻古窯には輪花茶碗がみられるなど、いずれもシャープにひきあげられた良質のものが多く、一部には灰釉が施されているなど多分に瓷器的な技法をのこしている。ここで区別しておきたいのは施釉された資料がのこっているといっても、泡池古窯や八巻古窯は前にのべた瓷器第三型式までのぼるものではなく、広く行基焼の中へ包括されるものであり、行基焼第一型式の中へ先行様式の伝統がのこされた資料と考えるのが妥当であろう。そして野々宮古窯の工人たちとは約1世紀のへだたりがあつて、直接的にはその母胎となっているのではないが、野々宮古窯と同系の猿投窯で形成された瓷器第三型式の窯から、良好な陶土をもとめて分れ移住してきたものであろう。

泡池古窯や八巻古窯は、行基焼第一型式の中でも瓷器的な技法を部分的にのこす古式なものであることはさきにのべたが、これとは別に、常滑窯の生産の中で大形甕についてのみは瓷器と同時代からはじめられているという説が古くからあつた。この点については榑崎彰一氏も猿投窯の終末期に甕の生産が激減していることに着目し、灰釉陶器の生産と併行してははじめられた可能性を指摘^(注8)して久しいのであるが、筆者も立松宏氏とともに小牧市における桃花台ハイタウン工事にともなう篠岡古窯址群の調査を担当し、尾北窯における研究成果からみて、その構想とほぼ同様な見解^(注9)をもっている。さらに知多半島の中央部において、甕や壺を専門に焼いている窯の中で、山茶碗・山皿・鉢などの小物をふくんでいない古式のグループがあり、この手の古窯の調査を累積しながらその印象を深めている。この構想をさらに敷衍すれば、常滑窯では大形甕の生産に関するかぎり、すでに11世紀代に猿投窯や尾北窯から分かれて成立しているというのである。さらに加えて12世紀初頭のころ、瓷器窯の衰退とともに八巻古窯や泡池古窯のような形で、山茶碗・山皿などの小物生産が追加されたわけである。猿投窯や尾北窯から知多半島の常滑窯に対する窯業技術の波及が、大物と小物の2回にわけておこなわれたというわけである。しかしこのことを事実として裏書きするためには、残留地磁気の測定などの方法による古窯年代の考察や、遺跡の調査により瓷器第三型式の碗・皿と行基焼第一型式の古式大形甕の伴出という立証手続きを加えなければならない。現在いまだ決定的な論証過程をしていない段階においては構想の紹介という程度にとどめておきたい。

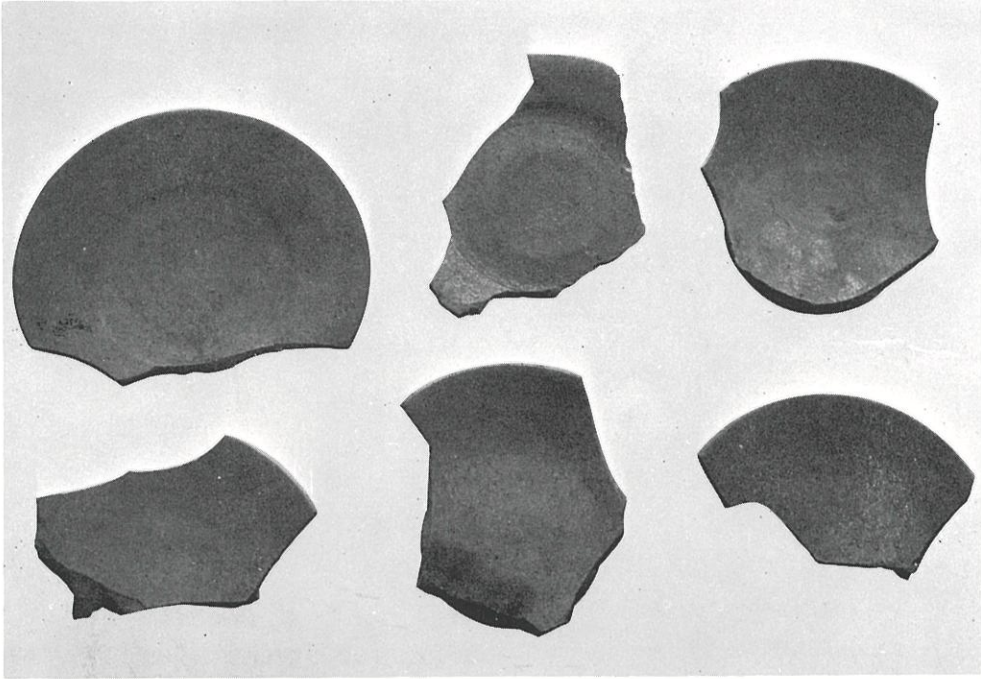
- 注 1. 松岡 浩「露根谷古窯址群の調査」野帳 2 号所収・昭和32年
2. 芳賀陽氏の発見による古窯で、昭和32年に大高町役場の委嘱をうけ芳賀氏と杉崎で調査したものである。
 3. 定納第一号窯の発見状態については、杉崎 章『巽ヶ丘古窯群』（八幡町史資料第 5 集・昭和35年）の中で紹介した。
 4. 前掲『巽ヶ丘古窯群』の中に、行基焼第一型式の資料として山茶碗・山皿の測図を報告した。
 5. 瀬戸市誌編纂委員会の委嘱により、久永春男氏や宮石宗弘氏とともに調査したもので、平安朝瓷器第三型式の格好な資料として測図の一部が、刈谷市誌資料『刈谷市の古窯』（昭和33年）に報告されている。
 6. 檜崎彰一「八巻古窯址群」（愛知県教育委員会『愛知県知多古窯址群』所収・昭和37年）
 7. 前掲『巽ヶ丘古窯群』の中に、行基焼第一型式の資料として一括遺物の測図を報告した。
 8. 檜崎彰一「常滑窯の成立過程」（河出書房新社『日本の考古学 6』所収・昭和42年）、ここにはこの可能性の指摘とともに、八巻古窯についても前掲（注 6）の見解を整理した形で紹介している。
 9. 近刊予定の『常滑市誌一本文篇一』所収、杉崎 章・立松 宏・磯部幸男「古代・中世」として概説してある。



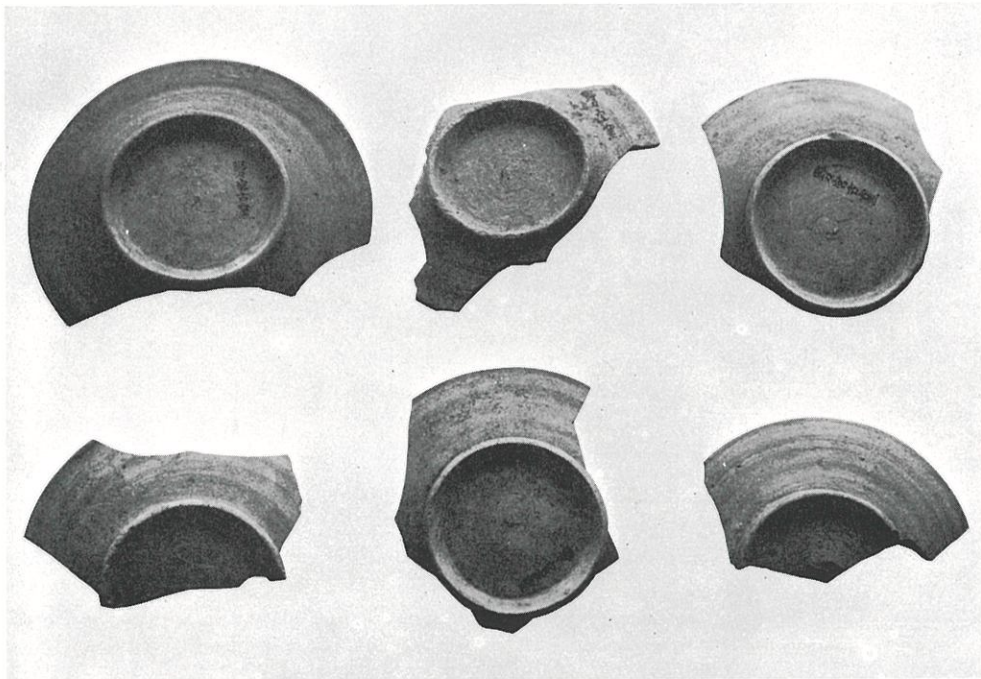
(1) 野々宮古窯の遠望



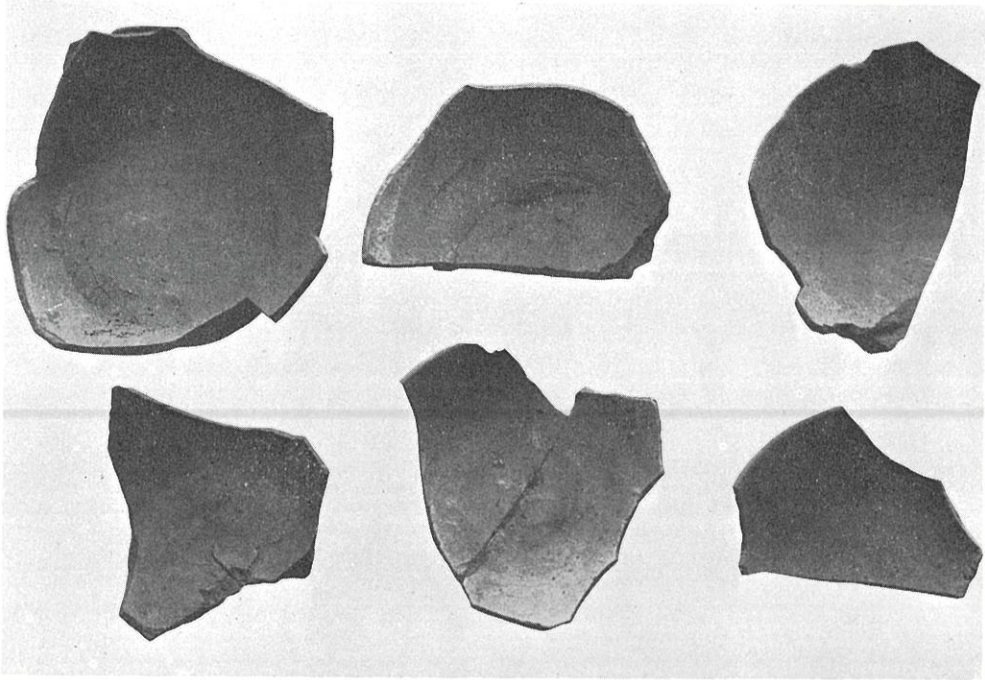
(2) 野々宮第一号古窯



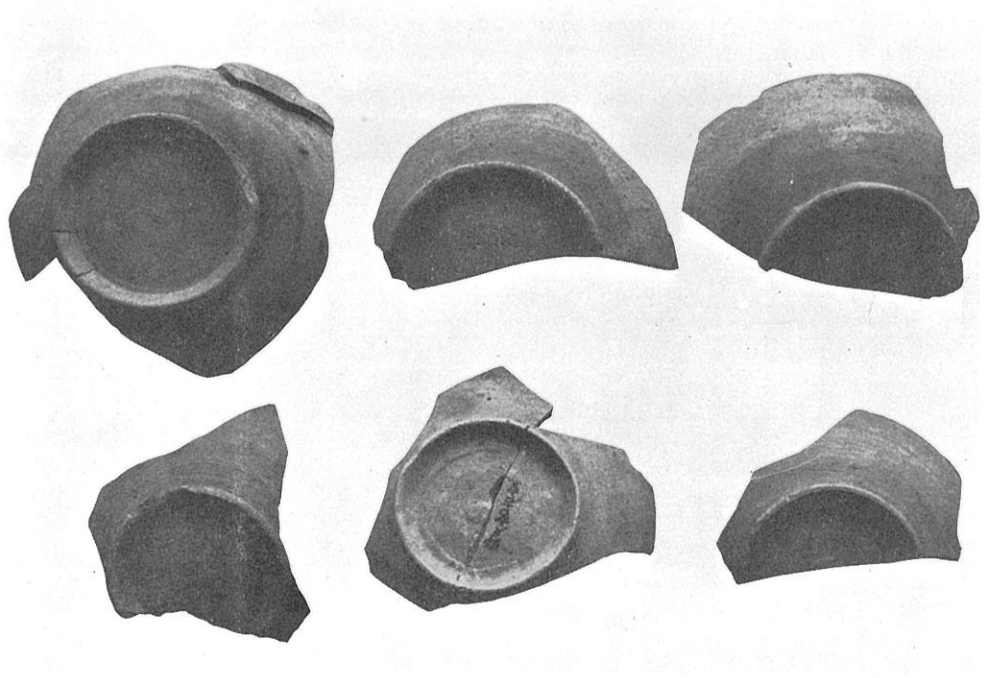
(1) 出土した皿・碗類



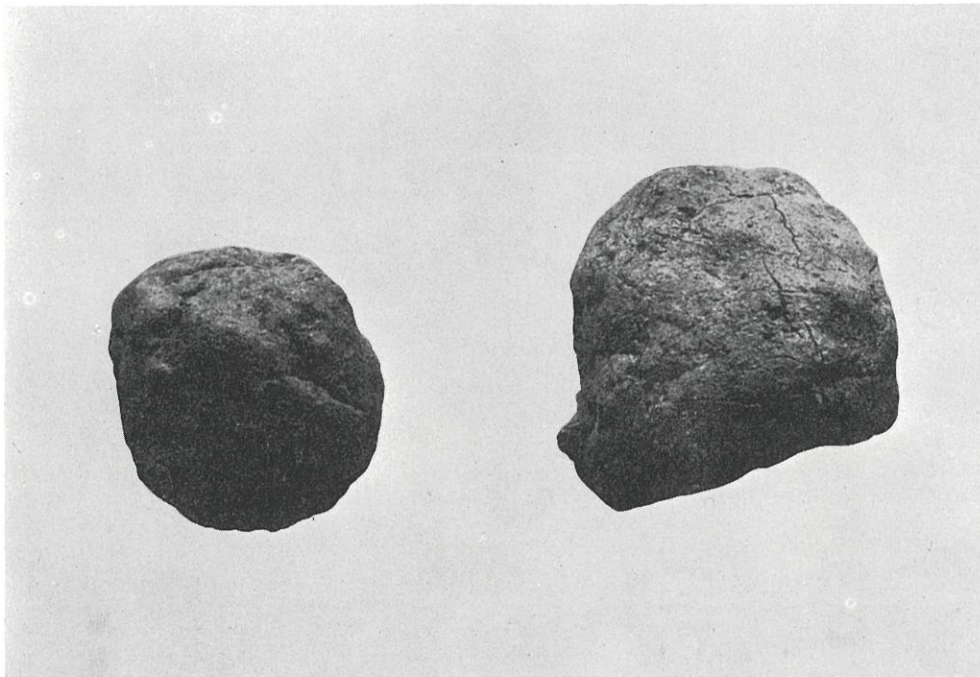
(2) (1)の底部



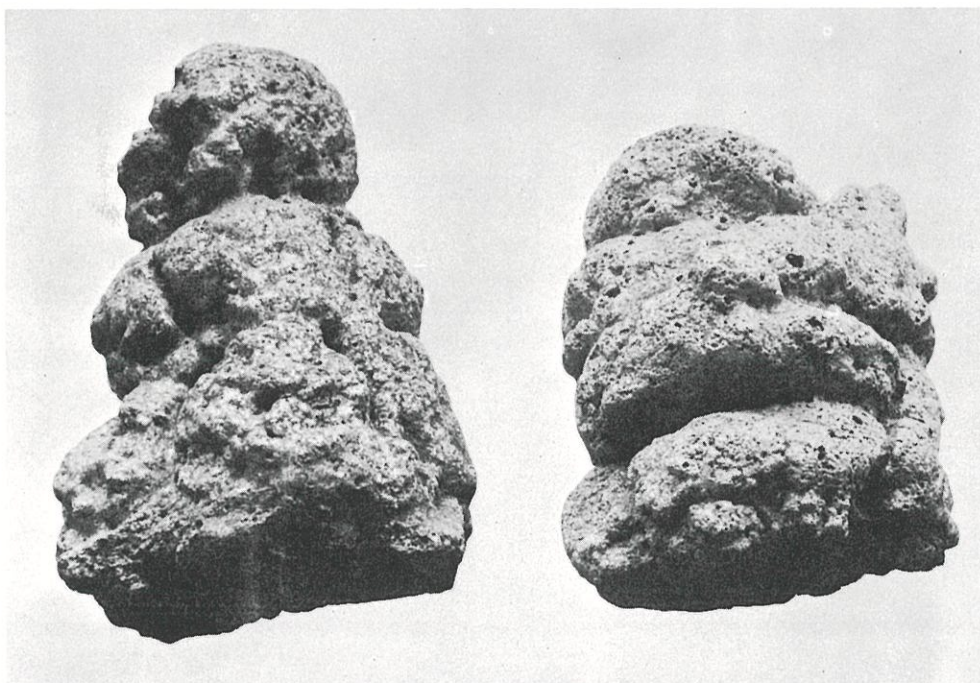
(1) 出土した皿・碗類



(2) (1)の底部



(1) 窯道具



(2) 窯道具

昭和50年8月20日印刷

昭和50年9月1日発行

野々宮古窯発掘調査報告

編集 大府市教育委員会
発行 大府市大府町雨兼31の1

印刷 大日本印刷株式会社
中部事業部